

7月 挨拶文

皆さまこんにちは、いかがお過ごしでしょうか。

7月に入りNY教会ももう一月このままの体制で活動を維持し様子を見ることといたしました。

教会がクローズして4か月目に入りますが、安全を期してゆっくりのペースで再スタートを図りたく思います。

この間コロナ感染により亡くなられた方々に対し心よりご冥福をお祈りいたしますとともに、今なお入院され治療を受けておられる方々の早期回復を祈る次第です。

また医療機関に携わる皆さま、私たちの日常を支えてくださるエッセンシャル・ワーカーの皆様に対しての感謝を忘れることはできません。

私たちは自粛生活に入りすでに3か月以上がたつわけですが、この未憎悪の体験から良くも悪くも多くのことを学んできたのではないのでしょうか。今までの日常からがらりと変わり静かな時が流れてきたような気がいたします。

否が応でも自分自身と立ち向かい目をそらすことができない毎日であったと思います。

全世界が一時停止状態となり、おかげで世界各地の都市の空気がきれいになり澄んだ青空が戻ってきたとはまったく皮肉なできごとです。仏教では「止観」といいますが、立ち止まり、じっくり物事を見つめる。この時のほからいが嫌がおうにも人々に示されている様にも思えます。

「忙しい」とは心を亡くすあるいは心を見失うとの意味ですが、いやでも自分の前に自分がいることに気付かされ、考えざるを得なかったのではないのでしょうか。自分とは何だったのか、何がしたいのか、何をすればよいのか。

あまりこれまでの日常では考えなかった問いも出てきます。

「対話」という言葉の解説でカトリックのアリンゼ枢機卿は「人と人との対話」がありますが、さらに「自分自身の中での心の対話」、「自然との対話」、目に見えない「神仏との対話」が大切と述べられています。

この時期、人と人が出会って楽しくお話をしたり、握手やハグもままなりません。会話は携帯かライン、インターネットを通じて

できますが、五感を通じて相手をより理解するには限界もあります。

しかし、宗教者(信仰者)はこれまで目に見えない、直接触れることのできない存在との対話を大切にしてきました。

そこに感謝の心、生かされて生きるお陰様の心を感じ取れるよう自分自身の中に育んできました。

ですから、携帯やラインといった道具としての限界を超え相手と繋がりあえる真心の対話は私たちの専売特許といっても過言ではないと思います。念ずる心、察する心、共感・理解する心、これまで私たちが身に着けようと努力してきた事柄です。

アフターコロナの時代がやがて訪れた時私たちの生活はこれまでの状態に戻ることはあり得ないと言われ、テレワークや

過密を避けた集まりが進むことと思います。ソーシャル・ディスタンシングなど人と人の距離を置く生活が日常化する中で「心の距離」をいかに縮められるか私たちの課題でもあります。今一層人さまを思うという念波を強くして行かなければならないのかもしれないかもしれません。今私たちに与えられたこの時を大切に過ごさせていただきます。

合掌

NY教会長

畠山友利